

4 他紙掲載論文概要

鳥取県におけるマクロライド耐性百日咳菌の流行

【保健衛生室】

上田 豊、増川 正敏、高野 史嗣、泉 ありさ、音田 李帆、最首 信和

百日咳は百日咳菌によって起こる急性の気道感染症であり、新生児や乳児が罹患すると重症化することがある。鳥取県では2024年6月以降、百日咳の大きな流行がみられた。年代別患者数は0～4歳区分の患者は少なく、ワクチンが通常1歳程度までに接種されることから、現行の百日咳ワクチンは有効に作用していると考えられた。患者の年齢層のピークはCOVID-19流行前が9歳であったのに対し、COVID-19流行後は12～13歳に上昇しており、活動範囲が広がり感染が拡大した可能性が考えられた。当所では、患者鼻腔スワブ24検体から9株の百日咳菌を分離した。このうち8株は23S rRNA遺伝子にA2047Gのマクロライド耐性変異を有していた。この8株は薬剤感受性試験でもマクロライド系抗菌薬3剤に対する最小発育阻止濃度（MIC）が $>256 \mu\text{g/mL}$ であることが確認されたため、マクロライド耐性百日咳菌（MRBP）と判定した。MRBPが分離された患者間には疫学上の関連性はみられず、複数のMRBPが同時に流行していることが推定された。

投稿雑誌

病原微生物情報 46 巻 2 号, p43-45, 2025

汽水湖東郷池に生育する水生植物相の変化

—環境省モニタリングサイト 1000 調査から見たこと—

【水環境室】

森 明寛*¹、成岡 朋弘*²、盛山 哲郎*¹、政井 咲更美*¹、横井 謙一*³

鳥取県中部地区に位置する汽水湖東郷池において、環境省モニタリングサイト 1000 事業に基づく水生植物調査を2018年と2023年に実施した。初回調査では9種（在来種7種、外来種2種）の淡水性水生植物が確認されたが、第2回調査では1地点でのみセキショウモが確認された。湖内全域の水質調査の結果、底層では湖面積の約84%で10 psu以上の塩分濃度となり、淡水性水生植物の生育が困難な環境となっていることが明らかになった。塩分濃度の推移から、2023年の湖内環境は過去30年で最も高い塩分濃度を記録しており、これにより淡水性水生植物が広範囲で衰退したことが示唆された。

* 1 鳥取県衛生環境研究所、* 2 鳥取県循環型社会推進課、* 3 日本国際湿地保全連合

投稿雑誌

全国環境研会誌 Vol. 50 No. 1, 37-41, 2025